

開会の挨拶

南 川 高 志（京都大学理事補（教育・学生担当）／文学研究科教授）

（南川） 第16回大学教育研究フォーラムの開催に当たりまして、松本紘総長の代理として、教育・学生担当理事補をしております私、南川が一言ご挨拶申し上げます。

皆さま方には年度末の大変お忙しいところ、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。このフォーラムも第16回を迎えるということで、全国の大学教育関係者を京都の地に招く集会として、大学コンソーシアム京都のFDフォーラムと並んですっかり定着してきたと伺っております。3月初旬には1000名以上が参加されるコンソーシアムのフォーラムがあり、3月中旬から下旬にかけて約500名の皆さんが参集されるこのフォーラムがあつて、京都で大学教育に関連する二つの大きな集会が3月に開催されることが恒例になっているとのことで、開催にかかわる本学としては大変うれしく感じております。

今回のフォーラムでは、67件の個人研究発表、8つの小講演、8つのラウンドテーブル企画が予定されており、とりわけ67件の個人研究発表というのは過去最高で、昨年より20件近く増えていると伺いました。このフォーラムは学会ではありませんが、学会ではないがゆえに、極めて多様な分野の大学教員や職員の皆さんが集い、大学教育に関連する実践や研究の成果を共有し合う場として成長してきたことを、主催者の一員として大変うれしく、また誇りに感じております。

さて、国立大学はこの4月から第2期中期目標・中期計画の期間に入ります。本学でも年度計画を定め、目標達成のために精いっぱい努力する覚悟でおりますが、FD活動の一層の進展を図ることもその計画に盛り込んでいます。現在も、高等教育研究開発推進センターが中心になり、全学のFD委員会を通じてさまざまな展開を図っております。

私は教育・学生担当理事補と文学研究科の教授を兼務しておりますが、京大文学部・文学研究科はしばらく前まで「FDって、フロッピーディスクのこと？」と言いだす教員ばかりではないかと外部から心配されていたようです。しかし、高等教育研究開発推進センターの先生方の講義を幾度も拝聴するなどして、現在では教員の意識も高くなってきたと思っています。それだけでなく、本日も午前中の小講演で文学研究科の哲学の先生である出口准教授が報告されているように、プレFDプロジェクトを実践して、将来大学教員になっていく若手の研究者のFD活動を、センターの確かな支援をいただきながら実践するほどになっています。ささやかですが、着実に変わってきていると私は感じております。

京都大学としては、学内のFD活動の進展を図るだけでなく、学外のFDにかかる情報を取り入れる必要も痛感しております。現在、本学のセンターでは地域レベルや全国レベルでFDの連携の拠点として機能するような活動も行っており、特に京都大学が代表幹事校、事務局を務める関西地区FD連絡協議会が地域レベルの活動の核になっているそうですが、この関西地区FD連絡協議会には関西地区の大学、短期大学の過半数が加盟し、FDに関する情報共有や共同での研修などを行っておられるそうですので、本学の教育活動もそこから大いに裨益させてもらいたいと期待しております。全国レベルでの活動はむしろ地域レベルでの活動よりも先行しているそうで、このフォーラムに加えて、夏には大学生研究フォーラムという集会も開催され、そちらのフォーラムにも例年、全国から200名余りの方々にご参加いただいているとのことで、誠に精力的と感心しております。

このようなセンターの活動は、文部科学省からの大きなご支援なしには進めていくことが難しく、大学教員教育研修のための相互研修型FD拠点形成には多額のご助成をいただいております。また、平成22年度からは教育関係共同利用拠点に認定されることを期待しております。その制度的基盤の上に、拠点としての活動を安定的に展開していけるようになることを切望しております。

本日、私の挨拶の後には「大学教育の実践知を共有する」と題する松下センター教授のご講演が行われ、さらに教える集団をどう組織するかというシンポジウムが予定されています。そこでは、文教行政の立場からFDの組織化への期待をお聞きするとともに、FDの組織化を先進的に進めてこられた愛媛大学、流通科学大学、三重大大学の事例を

伺うことを通じて、どうすればFDが強制的、形式的なものではなく、実質的に教育改善に寄与するものになり得るかを考えていきたいと、企画サイドから伺っています。全国からご参加の皆さまに活発な議論をいただければと考えております。

さて、私自身のことに少しだけ触れさせていただきたいのですが、私自身の専門領域は、今から約1800～2000年前のローマ帝国の歴史です。そんな浮世離れたことを研究している学者を、リアルな課題の山積する大学教育の企画を考えねばならない理事補に登用するあたり、ある意味、全く京大らしいと思われるかもしれません。ただ、私の専門領域の西洋古代史は、ヨーロッパの大学で教授されてきた最も伝統的で正統的な学問領域といってよい古典学（Classics）というものに属しています。そして、研究の関係上、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学などのヨーロッパの伝統的な大学と付き合いの中で、私は専門研究に潜みつつも、教育とは本来どうあるべきかを、教える側、学ぶ側の双方に立って考えてまいりました。

ご承知のように、ヨーロッパの歴史ある諸大学は、研究だけでなく、教えることをめぐって多くの試行錯誤を重ね、大変な努力をしてきましたので、そこから学ぶこと、考えることは実に多くあります。理事補就任後、私は中期目標・中期計画の教育分野や、京都大学全学のアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーの策定などに従事しつつも、時々、現実から少し距離を置き、やや抽象的な問題も考えるようにしてまいりました。教育というものも、時の政治動向や経済状況、世論などに大きく左右されます。先ほどオックスフォード大学、ケンブリッジ大学の名に触れましたが、先生方は既にご存じのように、現在イギリスの大学は特に財務を中心としてなかなか大変な状況にあるようです。日本も何かと慌ただしいことが多いのですが、教育の持つ重大さを深く考えるならば、いかなる事態にあっても何が一番大切かということをしっかし見据えた上で、広範囲な活動を展開していくことが常に大事であると考えております。

この関連で言えば、FDもテクニックやアンケート、あるいは形式などにとどまるはずがなく、学ぶ者を真の意味で成長させるという目的に直結するものであるはずです。実現することはなかなか容易でないことは私も承知しておりますが、皆さまのご尽力とご教示を大いに期待しております。

最後は私ごとになってしまいましたが、この2日間、どうか有意義なご議論をいただき、本フォーラムのすべての企画がわが国の大学教育改善に十分な機能を果たすことを期待しまして、私の挨拶とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました（拍手）。

（大塚） 南川先生、どうもありがとうございました。

文学研究科のプレFDのことなどにも触れていただきましたが、午前中の小講演の部でもご紹介させていただいた、今年度から私どもセンターが関わって始めております注目の新プロジェクトです。文学研究科のOD（オーバードクター）がリレー講義をするのですが、その全ての授業を「公開授業」とすると共に、ミニ検討会も行っています。さらに、学期の最後に研修会を行っていますが、その研修会のとき、このプレFDプロジェクトを発案してくださった文学部の出口先生が仰っていたことが今も私の印象に残っています。大学の先生方は、ややもすると研究マインドが前面に出ますので、FDに関しては、「FDなんて」というようになりかなりネガティブな印象を持たれてしまうのですが、それが自分自身のためのものであるということを強調されたのです。「今、自分たちがオーバードクターという立場にあって、これから大学に職を得ていくためには、哲学という難しいと思われるものが、いかに面白く分かりやすいものであるかということを伝えていかないといけないのだ」と力強く、研修に参加していた若手に訴えられました。「FDが自分自身の身を助ける」ということが、若手の人たちに切実に捉えられるようになれば、伝統的な文学部、文学研究科の雰囲気もかなり変わっていくのではないかと感じているところです。

そんなこともあり、FDもいろいろ変わってきていると思いますが、南川理事補からご紹介がありましたように、京都大学でも特別教育研究経費枠で『大学教員教育研修のための相互研修型FD拠点形成』という概算要求プロジェクトが採択されたりもしています。本フォーラムの特別講演は、通常は、外からゲストをお招きして、われわれがいろいろとお話を伺って勉強させていただくという場にしていたのですが、ちょうどそのプロジェクトを2年間やってきたところでもありまして、今回は、私どもの活動内容をぜひ内側から外側へ発信させていただく機会にしたいと考えました。特別講演と書いてありますが、これは去年のものをそのまま使った言葉でありまして、むしろ講演というよ

りも特別報告という感じで、私どもセンターの松下佳代から、「大学教育の実践知を共有する—コミュニティ・ネットワーク・コモンズ—」というテーマで報告をさせていただきます。1時間ほどお耳を拝借したいと思います。それでは松下さん、軽い感じでお願いします。